

# 『野草のチカラ』



梅雨入りして間もなくの頃にはなかなかそれらしい雨が降らなかったのが、ここに来て降り始めたとなん、驚かされるのが草の勢いだ。たちまち辺り一面が緑一色になる。

草取りの手間を思うと、ついつい草は『敵』として見做しがちである。だが、しかし、普段片っ端から引き抜いている草の中にも、実は食べられるものが多い。しかも、葉草としての効能を持つものが少なくない。ゲンノショウコは整腸に、ドクダミは利尿、解毒、緩下に、というのはいく知られているものだが、タンポポ、スギナ、オオバコ、ハコベ、カタバミ、スベリヒユなどの畑や庭の常連も、食べられるだけでなく実はそれぞれ薬効をもつ野草なのだ。

人間はこれらの草をひっくるめて『雑草』と呼んでいるが、どうしてどうして一つ一つの草が実に個性的な特徴をもち、生き残るための工夫が長い年月を生きる間に組み込まれていて、その仕組みの巧みさには驚嘆せざるをえない。生命力の強さをたとえて「雑草のような」とはよく使われる表現だが、その野草に命を救われ、ものごとの見方考え方の根幹まで変えられたという人の著作を、この冬の間読んだ。

著者は韓国の軍事独裁政権下でスパイの濡れ衣を着せられ、無期懲役の宣告を受け、特別恩赦で釈放されて十三年という年月を刑務所で過ごした人だった。のちにこのスパイ容疑は軍事政権の作ったでっち上げだったことが報道された。投獄された彼がどんなに無実を叫び訴えようとも、容疑自体が国家の捏造では容易に解放されるわけもなかった。絶望のうちに独房生活を送る間、当然のごとく心身ともに彼の健康は損なわれていった。そんなある日、一日一時間だけ許される運動時間に外に出た彼の眼に、刑務所の運動場に生えている草が飛び込んできた。それを見た彼は「これもわたしの身体の一部なのだ」と感じ取ったという。見るものは自分の身体以外にない独房の中で、「自分が接しているあらゆるものを、自分の身体をじっくりと観察するように」と著者は言っている。運動場の草をじっくりと観察するように、それを健康のために食べるようになる。次にはそれを刑務所の庭で栽培するようになった。野草の生命力は、彼の生きる力となった。

刑務所で書いたものは自分で所持することが許されないもので、彼は観察した野草の記録を『手紙』にして妹に送った。それが一冊の本になった。「自然の世界には、数えきれないほどの命があり、そのすべてが一寸の狂いもなく本来の場所に収まっている。いるべき場所にいる。それが私の幸せだ。生命の本質は平和なのだ」と野草に教えられ悟った」と語るファン・

デグオン氏の著書、『野草の手紙』とこの冬出会ったことで、自然とはいかにたくみに調和を保った世界であるかを教えられた。

春、今年の芽吹きはこのほか美しく心に沁みた。空を飛ぶ鳥も、遅めに開いた花たちも、日々濃くなつていく緑も、わたしを取り巻く自然のすべてが輝いて見えた。人間を中心においてものごとを見ることから一歩はずれてみたら、世界が少し違って見えるようだ。

『雑草』という言葉は、「望まない場所に生えた草」、「不適切な場所に生えた不適切な草」などと定義づけられ、農業においては引き抜き、刈り取り、葉を撒き、焼き払い、あらゆる手段で駆除される。人間を中心に考えれば、雑草はこう捉えられているわけだが、昔から人はそうしたわけではなかった。まず人は長い間の観察と経験から、食べられるものと食べられないものに別け、食べられないものも生活に役立つものに別け、適した用途に活用してきた。堆肥にする、ホウキを作る、縄をなう、カゴや帽子を編む、屋根にのせる……。

この春は久しぶりに野草で糸を染めてみた。野草のチカラを白い糸に移しとつてみたかった。草取りの産物の中に思いのほか集まったアカネの根を煮出してみた。白い木綿糸を浸してみると、春らしい桃色に染まった。その次には、伸び盛りのヨモギを摘んで染めてみた。こちらは落ち着いたヨモギらしい緑色になった。化学染料以前の時代には、人々は植物を用いて糸や布を染めてきた。この植物はこの色が出ると思っても、時季が違ったり生える場所が違えば、染める毎に微妙に色が変わる。まさに自然の贈り物なのだ。それがまた染色の喜びでもある。久しぶりに再開した染色は、わたしの身体の一部となつて表われた。「どんな命にも等しく尊い価値がある」と、絶望の果てから野草に教えられたファン・デグオン氏の言葉に、これまでとはどこか違う心持ちで野草と向き合っている自分がある。



アカネで染めた糸



ヨモギで煮染め